

15～17世紀における東南アジア 陶磁器からみた陶磁の日本文化史

堺環濠都市遺跡出土遺物を中心として

The History of Ceramics in Japanese Culture from the Standpoint of
Southeast Asian Ceramics from the Fifteenth Century to
the Seventeenth Century: Centering on
Artifacts from Sakai Kango-toshi Relics

森村健一

はじめに

①研究史

②東南アジア陶磁器の年代観

③輸入産物の容器としての東南アジア陶磁器と

茶陶として輸入された東南アジア陶磁器

④東南アジア陶磁器の使用法

⑤近世茶の湯スタイルの確立と東南アジア陶磁器と近世陶磁器の確立

【論文要旨】

近世陶磁器の萌芽期は1585年前後であり、その確立期は1598～1615年である。この時期、大きな影響を与えたのが、東南アジアの陶磁器である。それらは、首里城跡（1459年大火）、中世大友城下町跡（1586年、島津侵攻大火）、フィリピン・サンディエゴ号沈没船（1600年12月14日）、ピッティ・レウ号沈没船（1613年）を基準資料とし、年代観が与えられる。また、生産窯も近年の発掘調査研究によって判明しつつある。

東南アジア陶磁器には、本来は香花酒、硝石を入れていたと言われるタイ・ノイ川窯系四耳壺、砂糖を入れていたと思われるベトナム・ミースエン・フックティク窯跡の長胴壺等があるが、日本に輸入されると転用された。中でも重要なのは、日本文化の総合である茶の湯に使用された事である。南蛮、茶壺、切溜花入、切建水、粽、内洪水指と呼ばれた茶陶が、堺において16世紀後半～1615年大火の茶室等から一括出土している。他方、当初から茶の湯に使用する目的で輸入したものもある。「宋胡録」と呼ばれたタイ・シ・サッチャナライ窯系鉄絵香合、ベトナム白磁碗である。

日常食器ともてなし用の組物、ケ・ハレ用の組物、茶の湯に関する茶陶と懐石料理の組物が近世陶磁器の確立へと走らせた。茶陶には一点主義が見られ、明らかに使用者の選択・個性化が知られる。茶陶システムの確立は、陶磁器の種類・器種・数量において多様性、多量化が見られ、日常食器にプラスして出土することから、16世紀後半～17世紀初頭にあっては爆発的増加を示している。この時期は東南アジア貿易が特徴であり、東南アジア陶磁器は近世茶の湯システムの確立過程と連動しているのである。それらを動かした人々は経済的中間層の都市民であり、そういう意味でも、茶の湯を使った経済人としての「もてなし」、茶人としての「ステイタス」「個性化」が近世茶の湯システムと近世陶磁器を成立させたと言っても過言ではない。